平成23年度

富山市民感謝と誓いのつどい

と　き：平成23年8月1日(月) 午後1時30分

ところ：富山国際会議場 メインホール

主 催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山市自治振興連絡協議会
富山市老人クラブ連合会
富山市婦人会
富山市小学校長会
富山市社会福祉協議会
富山市民生委員児童委員協議会
富山市母親クラブ連絡協議会
富山市中学校長会
富山市遺族会
富山市児童クラブ連絡協議会
富山市PTA連絡協議会

中学生作文最優秀賞

「戦争と平和」

富山市立八尾中学校三年生　**小林 光里**

私が「戦争」について深く考え始めたのは、最近になってからです。それまでは「戦争」と言われても遠い過去の話で、自分には無縁のことだと思っていました。けれども、学校での調べ学習や、戦争を経験してきた祖父母に話を聞くことを通して、「戦争」というものをとても身近に感じ始めました。また、修学旅行で訪れた沖縄県では、戦争を経験された方の講話を聞いたり、実際に戦争中に利用されていた場所や物を見たりしました。戦争中は何もかもが不足し、水一滴がとても貴重だったと知りました。今、水があたりまえのように手に入ることが、どれだけありがたいことかを実感することができました。また、戦争中は、とても衛生状態の悪い場所や物を利用しており、今の豊かな生活からは考えられないことばかりでした。修学旅行では、今まで知らなかった戦争の悲惨さやおそろしさを初めて知ることができました。そして、戦争は多くの人々の命を奪い、また助かった人の心にも深い傷をつけたおそろしいものだと知りました。

沖縄県と富山県では、場所は違うけれども、私のふるさとである富山県でも戦争中にとてもつらい思いをしていた方がたくさんおられたのだと思うと、とてもつらい気持ちになりました。しかし、それと同時に、つらい戦争を乗り越えて、富山県の発展に力を注いできた方がたくさんおられたことにも気がつきました。今、この富山県が美しく豊かな場所であるのは、戦後の発展に力を注いできた方々の努力や苦労があったからだと思います。戦争でつらく悲しい思いをしてきた後でも、富山県の発展のために立ち上がった方々は、本当にすごいと思うし、もし自分だったら、戦争で家族や友達を亡くし、つらい思いをした後に立ち上がることは絶対できないと思います。また、戦後の努力や苦労が無かったら、今の私の生活もこんなに豊かでは無かったと思うので、発展に力を注いだ方々への感謝の気持ちを忘れてはいけないと思いました。

「戦争」について深く考える中で、今後、自分が何かできることはないのかと考える気持ちが出てきました。戦後守られてきた平和を今後も守っていくためには、私達若い世代が動いていかなければならないと思います。私は、戦争について見聞きした事実や自分が思ったことを後世に伝えていきたいです。そうすることで、若い世代が平和について深く考え始め、富山県の平和が受け継がれていくと思うからです。平和が受け継がれていくことは、戦争を乗り越えてこられた方々も望んでおられることだと思います。

今後は、今ある平和な生活への感謝の気持ちを忘れず、自分の命と郷土を大切にできる人間になっていきたいです。また、今までに築かれてきた豊かで平和な富山県をしっかりと受け継ぎ、後世に伝えていきたいです。

小学生絵画最優秀賞

●三・四年生の部

「自然がいっぱい、エコ生活をおくろう」
富山市立大沢野小学校 4年1組　**金山 すずな** さんの作品

●五・六年生の部

「はばたく未来」
富山市立芝園小学校 6年1組　**廣川 七海** さんの作品

富山市のあゆみ展

■日時・場所
7月30日(土) 午前10時～午後6時
7月31日(日) 午前 9 時～午後6時
8月 1 日(月) 午前 9 時～午後4時
富山国際会議場 1F交流ギャラリー

■内　容
富山市の歴史の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

このプログラムは再生紙を使用しています。

式　典

1. 富山市の紹介映像

2. 「永久（とわ）の火」入場　奉持者　富山市立八尾中学校生徒

3. 国歌斉唱

4. 黙とう

5. あいさつ　富山市長　森　雅志

6. 朗読　「私の戦争体験記」から
「B29小松付近を東北進中」／加藤 志づ子
朗 読／声のライブラリー友の会　黒田 伊津子

7. 代表献花及び一般献花

8. 「永久の火」昇天

富山県戦後50周年記念事業実行委員会・富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会発行
「私の戦争体験記」（平成7年11月2日発行）より

「B29小松付近を東北進中」

富山市三番町　加藤 志づ子

昭和二十年八月一日、この日はとても暑い日であった。あまりにも明るい月夜に灯火管制も何の役にも立たず、ラジオから流れてくる「B29小松付近を東北進中」の放送でなぜか私はただならぬものを感じた。

今まで何度も同じように放送されていたはずなのに、その日に限って無気味に思った。いつもと違う直観的にひらめいたそのことが、やがて焼夷弾を受けることなく無事避難できたのは神の助けに外ならないと思う。

母と姉と兄と当時女学生の私は、いち早く防空頭巾をかぶり五番町光厳寺あたりから梅沢町（別名寺町）を抜けようとした時、B29の爆音が聞こえ、焼夷弾が落ちてきた。

瞬間、防空壕に入るか道端の溝に伏すべきか迷ったが、母は、ただ逃げるべきと、いたち川沿いに南へ南へと、爆撃機とヒューヒューと落ちる爆音を背に感じながらひたすら走り続けた。

大泉の八幡社（大泉神社）まで逃げて広田用水につかった。B29は同じコースを何度も飛来しては焼夷弾を落とした。どの焼夷弾も自分の頭の上に落ちてくるようで、その度に身をすくめ祈るような思いだった。何の抵抗もできない日本の国はどうなっているんだろうと、うらめしくも思った。しかし、自分の身の回りには一発も落ちてこないのが本当に幸いであった。

市内一円は炎に包まれ、そのあかりに照らされたB29は銀色に光り、明るい線となって落とされる焼夷弾は、こわさの中にも、二度と見ることのない美しい絵を見ているような錯覚を覚えた。

長い長い時間が過ぎ、B29の爆音も消え、夜が白み始めた。ようやく、自分たちは空襲にあったのだと悟り、ぼう然となった。

私たちよりずっと後から逃げた人の中には、焼夷弾の直撃を受け、動かなくなった肉親のかすかな声を聞きながら助けることもできず自分一人だけ逃げて来てしまった人や、田んぼや畑に転がりながら川につかったりしてようやく命が助かった人もいた。道端には衣類が焼けこげて息の絶えている人、真っ黒になって転がっている馬。地獄とはこのようなことかと思った。防空壕に避難した人は全員死亡と聞き、何のための防空壕だったのかと思ったりもした。

一日の夕方から、やがての時に疎開することに決めていた父の友人の納屋へ、父はわずかの家財をリヤカーにのせて運んだ。小学生二人の妹たちは、毎日夕方になると黒瀬の親せきに疎開していたため、直接空襲にあうことなく無事だった。「欲しがりません、勝つまでは」の合言葉のもとで、発育ざかりの私たちは、かぼちゃの茎や、いものつるの入ったおつゆの中にごはん粒の浮いた雑炊を食べていた。それだけに二日の朝、炊き出しで配られた、〝銀飯〟の大きなおにぎりのおいしかったことは一生忘れることはできない。

戦時中は生きることに精いっぱいだった。パンに入れるためにとイナゴをつかまえたり、馬の食糧用に乾草刈りをしたこと、戦況が激しくなると学徒動員として不二越でドリル作りに励んだこと、敵の上陸に備えて竹ヤリ訓練をうけたことなどなど。

戦争の愚かさを味わった私たちは、再び戦争を起こしてはならない。平和な世界を築きあげるべく努力することが、われわれ戦時中を生きたものの使命であり責任であるとも感じている。

氷見市島尾海岸に漂着した富山空襲の犠牲者を供養するため、現地に建立された慰霊像

空襲時の体験文を随時募集しています。400字詰原稿用紙3～5枚程度にまとめて、市民生活相談課へ。